

ま ちかど インタビュー



避難生活を終えて帰町された方の想いは 仮設・借り上げ住宅の供与期間が終了

東日本大震災と原発事故から6年が経過し、平成29年3月末をもって仮設住宅・借り上げ住宅の供与期間が終了しました。それに伴い、帰町された町民の皆さんはどのような気持ちで帰町されたのでしょうか。

今回、帰町された方の今の心境をお伺いしました。



木田 巧 さん
(折木)

私は、原発事故後、避難先は町民バスで小野町体育館から八幡屋、松柏館へ。

仮設住宅は中央台高久へ平成23年7月2日より平成29年3月30日まで、共同生活、行事に参加でき良い経験ができました。

その間、会社の定年を迎え、現在広野町警戒パトロールに勤務しています。

広野町に戻り、仕事の警戒パトロールにおいて、住民が安心して生活できるように、町の全域を警戒していきたいと思っています。



加藤 朝子 さん
(広洋台)

仮設での生活はカラオケ、手芸、スポーツと行事があり住民の絆も強く充実した毎日を送りました。支援も多く受けたことに全国の皆さんに感謝したいと思います。

帰町したのは先祖の霊を守らなければならないという思いからでした。

これからは、仮設の体験を生かし健康に気をつけながら、地域の皆さんと声かけあって仲良く暮らしていきたいと思っています。

編集後記

本年度は、一般会計・特別会計合わせで、約111億円となる生活再建の具現化を図る当初予算が可決されました。

春の訪れとともに帰町された町民の方々は、「元氣だった?」「変わりなくて良かったね。」「やっぱり広野はいいね。」

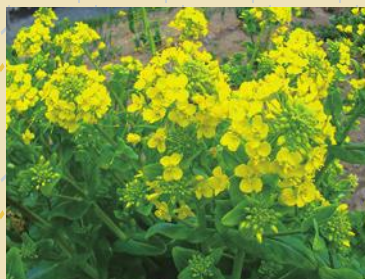
と賑やかに交わす会話や、小・中学校の新一年生が、元氣良く挨拶し登校する光景など、震災前の活気を取り戻せております。

東日本大震災・原発事故から7年目となる中、町民一人一人の自立を目指す新たなスタートが切られました。

もう一度、広野町民の精神に立ち戻り郷土に住む自覚と誇りをもち、先人が築いた品性豊かな心を

受けついで、お互いに心を合せ、明るく住みよい、緑と光の豊かな町作りを目指し、町民の皆様と共にしっかりと進めて参ります。

(遠藤 浩)



発行・編集責任者

議長 黒田政徳

広報委員会

委員長 塩 史子

副委員長 阿部憲一

委員 北郷幹夫

委員 小磯利雄

委員 遠藤 浩

次の定例会は6月です